『東京大学言語学論集』34 (2013.9) 25-41

物理的介在物を補部に取る用法の英語前置詞 by

—可算性選択の原理—

平沢慎也
hiralingual1026@gmail.com

キーワード： by 手段 可算性

要旨

人間が何かの行為を行う場合、時として、二つの地点の間に物理的に介在するものを手段として利用するが、英語はこの介在物を前置詞 by で導入することがある。本稿はそのような by の用法のうちの 5 つ（「部位用法」「連結用法」「経路用法」「乗り物用法」「メッセンジャー用法」）に注目し、これらの用法において by の補部名詞句が可算名詞でマークされるか不可算名詞句としてマークされるかを調査し、可算性の振舞いに次のような原理が見られることを指摘する：

by の補部名詞句が表す物理的介在物が、移動の概念と密接に結びつくことによって事態成立の手段として機能するという概念化がなされている場合には、その物理的介在物は不可算名詞としてマークされる。一方、物理的介在物がそこに存在していることそれ自体が手段として機能しており、移動は手段としての機能に関与しないというような概念化がなされている場合には、その物理的介在物は可算名詞としてマークされる。

こうした原理の背後には、by の中心的な用法の一つである動作主用法との差別化があるのかもしれない。

1. はじめに

英語前置詞byには、他の前置詞には見られない独自の特徴がいくつか見られる。そのうちの一つは、前置詞の側が補部名詞句の定・不定や可算・不可算を指定することが多いというものである。たとえば、I get paid **by the hour**.（僕は時給制で給料をもらっている）やI went there **by car**.（私は車でそこに行った）といった例で、an hour/the carのような形を取ることは許されない。「hourがどのようなhourか」「carがどのようなcarか」といった補部名詞句の意味的特徴によって形を変えるのではなく、前置詞のbyの側から形を指定されているのである。byではこのようなことが頻繁に起こるが、他の前置詞ではこの種の現象は必ずしも頻繁ではない。

本稿は、by独自の特徴のうち、補部名詞句の可算性の振る舞いについて考察する。byの用法のうち、行為者が事態を成立させる際の手段として利用する物理的介在物を補部に取る用法（具体的には、「部位用法」「連結用法」「経路用法」「乗り物用法」「メッセンジャー用法」と

いう五つの用法）を分析の対象とする[1]。各用法に第2章から第6章までの一章ずつが割り当てられており、その各章内で当該用法の定義・特徴付けを行い、補部名詞句が可算性に関してどのように振る舞うかを示す[2]。第7章では、第2章から第6章までの内容を俯瞰し、物理的介在物がどのような場合に可算名詞句としてマークされ、どのような場合に不可算名詞句としてマークされるのかという文法的な振舞いの背後にはある共通の原理が働いていることを指摘する。結語では、その原理が生じた理由について一つの仮説を提示する。

意味の分析にはコンテクストに対する理解が不可欠であるという立場から、例文は可能な限り自分が初めから終わりまで内容を把握できている小説やTVドラマなどから採るようにした。ただし、該当する用例が見つからなかった場合にはGoogleブックスや辞書、コーパスから採取した。辞書とコーパスは紙幅の都合で略称で表記してある。正式な名称は参照文献の末尾のリストを参照されたい。特に出典の明記されていない例文はインフォーマントの作例である。

2.　部位用法[3]

2.1　定義と特徴付け

人間Aが物体や別の人間B（本章では「対象」と呼ぶ）を自分の移動する方向に移動させたい時または自分が留まっている位置に留まらせたい時（つまり、物理的位置という観点で対象と一体化することによって対象の位置を継続的にコントロールしたい時）、典型的にはその対象の一部に接触することが必要となる。その「一部」が「物理的介在物」にあたり、これを表す名詞句（定冠詞または所有格でマークされる）をbyの補部に取るのが「部位用法」である。この用法ではby句が修飾する動詞句は「掴む」ことを意味する（ないし、意味の一部に含む）ことが大半であるが、対象を「掴む」こと自体は目的ではないということに注意しなければならない。目的はあくまでも対象との物理的位置の一体化およびそれによる継続的コントロールにあるのである。たとえば以下の例を見てみよう。

(1)　"Come," he whispered as he grabbed me **by** the arm and led me to the very edge of the cave.
(Eric Walters, *The Bully Boys*)
（「こっちだ」と彼は囁きながら私の腕を掴み、私を洞窟の端の端まで連れて行った。）

(2)　'You've sure got a handsome wardrobe,' he said as he walked into Nashe's room, holding up the jeans **by** the waist.　(Paul Auster, *The Music of Chance*)
（彼はジーンズのウエスト部分を持ちながら「なかなか良い服持ってんじゃん」と言って、ナッシュの部屋へと入ってきた。）

(3)　[...] several people come up and draw me **by** my naked arm and tell me first how moved they

---

1 「物理的介在物」と記したが、ここで言う「物」は thing の意味ではなく entity の意味であり、従って人間・動物も含む。また、by doing ...のように、by の補部名詞句が触ることのできない抽象的な entity を指すケースは、本稿が「物理的介在物」と呼ぶものからは外れるため、分析の対象外とする。
2 本稿では「不可算名詞（句）」と「裸名詞（句）」を区別せず、どちらも「不可算名詞（句）」と呼ぶ。
3 より詳細な議論は Hirasawa (2011)を参照。

were by the presentation. (Rebecca Brown, *The Joy of Marriage*)

（何人かこちらにやってくる。そして、ノースリーブの私の腕を引っ張り、まずはプレゼンテーションに感動したという話をし始める。）

(4) He didn't stop saying my name in his adorable English accent, leading me around **by** the hand, showing me his toys, even insisting that I take a tour of his bedroom.

(emily giffin, *something blue*)

（彼はひっきりなしに私の名前をイギリス訛りで言い、手を掴んで引っ張りまわし、遊び道具をあれこれ紹介してきた。挙句の果てに「寝室も見ていってよ」としつこく言ってきた。）

(1)では洞窟の端まで連れて行きたいから掴むのであり、(2)ではジーンズが落ちないように掴んでいるのである。(3)では、人々は語り手に「君のプレゼンテーションは素晴らしかった」ということを伝達したいと思っており、それを口頭で伝達するためには語り手にその場に少なくとも数秒は留まってもらうことが必要であるから、腕を引っ張って引き止めるのである。(4)では、家の中を案内したいから手を引っ張っているのだと考えられる。

部位用法における意味の本質は、対象を掴むことそれ自体よりも、対象と物理的位置の点で一体化すること、そしてそれによって対象の位置を継続的にコントロールすることにあるのだという主張は、次の事実からも確認できる。

(5) ?? Susan pushed John **by** the shoulder.

（スーザンはジョンの肩をドンと押した。）

(6) Susan pushed John along **by** the shoulder.

（スーザンはジョンの肩をドンドンと押して連行した。）

(5)が不自然なのは、alongをつけずにSusan pushed Johnと言うと、SusanがJohnの位置を自分の位置から離し、コントロール不能の領域に追いやったことになり、位置的な一体化と継続的コントロールを本質とするbyの部位用法とは相容れないからだと考えられる。一方、(6)が自然に響くのは、Susan pushed John alongはSusanがJohnを何度も押して自分の行きたい方向に一緒に移動させたということを意味する表現であり、位置的な一体化と継続的コントロールを本質とするbyの部位用法と相性が良いためであると考えられる。部位用法の本質を「掴む」という行為にあると想定してしまうと、(5)と(6)の容認性の違いを説明できなくなってしまう。

なお、byの補部名詞句が表すものは実際に対象の部位であるとは限らない。部位ではないが実質的に部位と見なせるものの場合もある。

(7) [...] Blackmore quickly became accustomed to being dragged to stage center, often **by** his

guitar neck.　(David Thompson, *Smoke on the Water—The Deep Purple Story*)
（ブラックモアは、舞台中央に引っ張られていくことにすぐに慣れてしまった。ギターのネックを握られて引っ張られることもよくあった。）

(8)　[…] he lifted me **by** my shirt tail up and out of the ditch […]　(Daniel Wallace, *Big Fish*)
（彼は私のシャツの裾を持って溝から引っ張りあげてくれた）

このような拡張が起こるのは、ギターのネックをある方向に引っ張ればそのギターを肩から下げて演奏しているプレイヤーもその方向に引っ張られるし、シャツの裾をある方向に引っ張ればそのシャツを着ている人もその方向に引っ張られる、という百科事典的知識があるからである。この知識のために、部位でないものが部位であるものと同じように部位用法の条件（位置的な一体化と継続的コントロール）を満たし、byの使用が可能になるのである。

2.2　可算性の検討

部位用法のbyの補部となる名詞句は、基本的に定冠詞と所有格でマークされるため、単数形だと可算名詞句として概念化されているのか不可算名詞句として概念化されているのか形の上では分からない。しかし、単数形で数詞のoneや不定冠詞を伴う例も見られること、そして複数形が容易に生じうることの二点を考えると、部位用法のbyの補部となる名詞句は単数形の場合も複数形の場合も可算名詞句として概念化されていると考えるのが妥当だろう。

(9)　'I've got a nice place here,' he said, his eyes flashing about restlessly.
Turning me around **by** <u>one</u> arm, he moved a broad flat hand along the front vista […]
(Scott Fitzgerald, *The Great Gatsby*)
（「この家、気に入ってるんだ」と彼は忙しなくあちこちに目をやりながら言った。そして片腕を掴んで私の身体をくるりと振り向かせ、指を揃えて伸ばした手を、広大な景色をなぞるようにして水平に動かした）

(10)　I have caught flies **by** their hind legs, **by** <u>a</u> wing.　(COCA)
（これまで後ろ足や羽を掴んで蝿を捕まえてきた。）

3.　連結用法[4]

3.1　定義と特徴付け

二人の人間や二つの物体（本章では「被連結物」と呼ぶ）を連結するとき、二者の間に介在することによってその連結を可能にしている物理的介在物をbyで導くことができる。介在物は連結されるもののうちの一つの部位であることもあれば、そうでないこともある。例文を見よう。

[4] より詳細な議論は Hirasawa (2011)を参照。

(11) Prosecutors [...] chained him **by** his ankles to a pickup truck [...] (COCA)
(検察官が彼の両足首を鎖にかけてピックアップトラックに繋いだ)

(12) [...] she tied him to a perch **by** a silken ribbon. (BNC)
(彼女は彼を絹製のリボンでとまり木に結びつけた。)

(13) [...] they hang him **by** the ropes to the central pole [...] (COHA)
(彼らは彼をロープで中心の柱に吊るした)

(11)では him と a pickup truck が his ankles によって連結されている。(12)では him と perch が a silken ribbon によって、(13)では him と the central pole が the ropes によって連結されている。his ankles は him の一部であるが、a silken ribbon は him の一部ではない。the ropes も him の一部ではない。

連結とは即ち位置的な一体化であり、かつ補部名詞句の指示対象が一体化されるものの部位であることもあるということから、連結用法と部位用法を区別しないという立場を採ることも可能である。しかし、連結用法は自他交替を起こすことがあり（つまり(11)-(13)では目的語で表されていた被連結物が主語に立つことがあり）、その場合には by で導かれる部位が主語の部位になり、部位用法とは決定的に異なる振る舞いを示す。

(14) The word itself derives from the Latin word meaning "to hang", and there could hardly be a situation more productive of suspense than that of a man clinging **by** his finger-tips to the face of a cliff, unable to climb to safety—hence the generic term, "cliffhanger".
(David Lodge, *The Art of Fiction*)
(suspenseという単語自体は「吊るす」を意味するラテン語の単語に由来するものである。確かに、人が指先だけで崖の表面にしがみついていて、安全な場所まで這い上がることができないという状況ほど、suspenseを生み出す状況はないだろう。だからこそ、cliffhanger（崖からぶら下がっているようなスリルのある状況）という言い方が一般用語として定着しているのだ。)

上の例のa man clinging **by** his finger-tips to the face of a cliffでは、a manとthe face of a cliffがhis finger-tipsを介して連結されている状態が描かれているが、his finger-tipsは誰の部位かと言えば、clingingの意味上の主語にあたるa manの部位である。このようなことは部位用法では決して起こらない。部位用法で問題になるのは目的語の部位であって主語の部位ではない。

3.2 可算性の検討

(11)から(14)の例を見る限りでは、byの補部名詞句が被連結物の一部である場合もそうでない

場合も、その名詞句は必ず可算名詞句であるかのように見える。しかし、次の例のように不可算名詞句が現れる場合もある。

(15)　The tubes are connected **by** rubber hose to a pipe which carries the solution [...]　(Google)
（それらのチューブは溶液を通すパイプとゴムホースで接続されている）

インフォーマントによれば、この例においてby rubber hoseの代わりにby a rubber hoseということも可能だが、by a rubber hoseはホースの物理的な実体を焦点化するのに対し、by rubber hoseは「液体を通す」という機能を焦点化する、という違いが感じられるそうである。

次の例においても、roadは道路の物理的実体よりも車を走らせるという機能の方が焦点化されているように感じられるそうである。

(16)　And in the final communique, Peru promised to help find international funds to link Bolivia to the sea **by** road.　(TIME)
（最終宣言の中で、ペルーは、ボリビアと太平洋を道路で繋ぐための国際的資金の調達に加担することを約束した。）

このように、機能に注目することで不可算化するという現象は部位用法では起こらない。これは部位用法と連結用法を区別する二つ目の根拠となる。

4.　経路用法

4.1　定義と特徴付け

byは次の例にあるように移動の経路（移動の始点と終点の間に存在する物理的介在物）を表す名詞句を補部に取ることができる。管見の限りでは、この用法についての記述的な研究は今のところ存在しないようである[5]。

(17)　I went down **by** a different staircase, and I saw another "Fuck you" on the wall.
(J. D. Salinger, *The Catcher in the Rye*)
（別の階段を降りて行くと、また壁に「ファッキュー」と書いてあった。）

(18)　I can't recall a single detail of the game, but I do remember that after the game was over my parents and their friends sat talking in their seats until all the other spectators had left. It got so late that we had to walk across the diamond and leave **by** the center-field exit, which was the only one still open.　(Paul Auster, *The Red Notebook*)

[5] Cuyckens (1999)は経路（path）を表す用法であると同時に手段（means）を表す用法であるとしているが、それ以上の分析は行なっていない。平沢（2013）も「〈経路手段〉用法」として言及はしているが、Cuyckens (1999)の指摘以上のことは述べていない。

（試合の詳細は全く思い出せないが、試合が終わったあと、他の観客が皆いなくなるまで席に残り、両親とその友人たちと喋っていたことは覚えている。あまりに遅くなってしまったので、帰るときにはダイヤモンドを突っ切って、まだ開いている唯一のドアであるセンター側の出口から出ることになった。）

まず、経路用法では移動者がその経路を意図的に選択していることが必要になる。(19)から(22)の例文は、移動主体の知性の程度が高い方から低い方へという順番で並べられているが、この順に沿って容認度も下がっていることに注意されたい。これは、経路を意図的に選択することがありえる程度とbyの使用の容認度が比例していることを示している、と捉えることができる。

(19) John came in **by** the second-story window.
（ジョンは二階の窓から入った。）

(20) ? A bird came in **by** the second-story window.
（鳥が二階の窓から入ってきた。）

(21) ?? A bug came in **by** the second-story window.
（虫が二階の窓から入ってきた。）

(22) * Smoke came in **by** the second-story window.
（煙が二階の窓から入ってきた。）

次に、他の経路との対比が意識されていないと経路用法のbyは使いにくい。この特徴は各種英英辞典の例文にも現れている。

(23) They came in **by** the back door. (LDOCE5)
（彼らは裏口から入ってきた。）

(24) It's quicker to go **by** the country route. (LDOCE5)
（田舎道を通って行った方がはやい。）

(25) We went in **by** the front door. (CALD3)
（私たちは正面玄関から入った。）

(26) We returned home **by** a different route. (MEDAL)
（私たちは別のルートで帰った。）

(27) She went in **by** the side entrance. (MEDAL)
（彼女は横の入口から入った。）

(28) Apparently the thieves had entered **by** the kitchen window. (HEED)
（どうやら泥棒たちは台所の窓から入ったようだ。）

(29)　We came **by** the back road.　(AHDE4)
（私たちは田舎道を通って来た。）

(30)　the family drove to the farm **by** the old highway　(Web3)
（一家は古い道路を通って農場へ行った）

(31)　entered the house **by** the back door　(Web3)
（裏口から家の中に入った）

こうしてみると、どの例文も、byの補部名詞句が限定詞＋形容詞＋名詞という構造をしていることが分かる。辞書編纂者の意図によるものかどうかは定かでないが、ここに形容詞が入ることによって、別の経路との対比が想起しやすくなっているのである。たとえばback doorと聞けばfront doorとの対比が容易に想起される。辞書の例文には「長々とコンテクストをつけることが許されない」という制約が存在するが、その中で効率よく経路用法の本質を伝えることができる例文になっているのである。

しかし現実の言語使用には必ずコンテクストというものが存在する。そのコンテクストの中で、byの補部の経路が他のどのような経路と対比されているのかが明示されることも多い。

(32)　Instead of taking the short cut along the Sound we went down the road and entered **by** the big postern.　(F. Scott Fitzgerald, *The Great Gatsby*)
（サウンド海峡沿いの近道は使わず、道路を歩き、大きな裏門をくぐって中に入った。）

(33)　She could have departed **by** the door, by daylight. Nobody would have stopped her. Perhaps she knew that. But she chose to go by night, and through the window.
(William Faulkner, *Light in August*)
（彼女は昼間にドアから出ることもできた。誰にも止められることなく脱走できただろう。おそらく彼女もそれを分かっていた。しかし夜に、しかも窓から、出て行くことにした。）

(32)では、the roadとthe big posternを合わせた経路がthe short cut along the Soundと対比されていることが明示されている。(33)では、byで導かれる経路が形容詞のないthe doorとなっており、コンテクストがない限りどのような経路と対比されているのかが分からないので、辞書の例文には見受けられなかったパターンであるが、ここではthrough the windowとの対比であるということが明示されているため、経路用法のbyの使用が可能になっているのである。

経路用法のbyの三点目の特徴として、by句が修飾する動詞句が表す移動は完結的な移動に限られる、ということを挙げることができる。(34)でbyの使用が容認されないのはjogの表す移動が非完結的移動であるためである。(35)では、went to the churchならば教会への到着が含意され

るため完結的移動と見なされbyの使用が可能になるが、went toward the churchは教会方向の移動ということだけが指定されており着点についての情報を含まないため非完結的移動を表すことになり、byの使用が容認されなくなる。

(34) Jack wanted to go running with his girlfriend without being seen by the paparazzi. Since they had once been photographed while running around the park, he decided they should jog [**along**/***by**] Beco Street instead.
（ジャックはパパラッチに見つからずにガールフレンドとランニングに出かけたいと思った。一度、公園の周りを走っていて撮られてしまったことがあるので、今度のジョギング場所はビーコ・ストリートにした。）

(35) Althorn Street was closed, so they went [to/*toward] the church **by** Dawlin Street.
（アルソーン・ストリートは封鎖されていたので、ドーリン・ストリートを通って協会［に／の方向に］行った。）

以上の三点をまとめると、経路用法のbyは、完結的移動を達成するための手段として他の経路よりも優れていると判断され利用される経路を導くのに用いられる、と言える。

4.2 可算性の検討

例文(17)のa different staircase、(26)のa different routeに不定冠詞が含まれていることから明らかであるように、経路用法のbyは可算名詞句を補部に取る。

しかし、本来経路を表すはずの名詞句の指示対象が経路自体ではなくその経路の上を通ることが典型的であるような交通手段・乗り物にシフトした場合、その名詞句は不可算名詞句としてマークされる。

(36) Buses carry 30 percent of those travelling **by** road. (COB6)
（バスに乗っている人の数は道路上を移動している人の数の30%を占める。）

(37) Most exports went **by** sea. (LDOCE5)
（ほとんどの輸出品は船で輸出されていました。）

roadやseaといったもの自体は本来移動の経路であるので、こうした用法が経路用法からの拡張であることは間違いないが、その拡張の程度がとても大きく、むしろ次の章で扱う「乗り物用法」に含めた方が妥当かもしれない。たとえば(36)の例を見ても分かる通り、by句によって修飾される移動が非完結的であっても問題ない。また、たとえばby seaが経路用法の域を出ないとすると、海を泳いで渡ることによって移動した場合にもby seaと言えるはずであるが、実際にはby seaと言えば船を使った移動に限られる。さらに、次に挙げるように、本来経路である

はずの名詞が乗り物を表す名詞と等位接続詞で結ばれている例も見受けられる。airは本来経路を表すはずであるが、(38)ではmetonymyに基づく意義展開によりairplaneを指しており、by airplane or coachの意味でby air and coachと言っているのだと考えるのが妥当であろう[6]。

(38)　This will take place over the May Day holiday weekend, and there is a choice of travel **by** air or coach.　(BNC)
（この移動はメーデーの週末に行われる。移動手段の選択肢としては飛行機とバスがありえる。）

by road [sea, air, rail]といった表現において使われている名詞自体（つまりroad [sea, air, rail]の部分）は本来経路を指すものであるということから、これらの表現を「経路用法」の章の中で扱うことにしたが、by road [sea, air, rail]は本質的には次章の「乗り物用法」に限りなく近い。ということは、経路名詞句が意義展開を起こさずに静的な経路を指す場合にはその名詞句は可算名詞句としてマークされるが、意義展開を起こして移動する乗り物を指すようになった場合にはその名詞句は不可算名詞句としてマークされるということになる。このことは第7章の議論で大変重要になってくる。

5.　乗り物用法

5.1　定義と特徴付け

意図的に選択した乗り物（移動の始点と終点の間を移動する物理的介在物）をbyで導くことができる。これを「乗り物」用法と呼ぶ。このとき、byの補部名詞句は無冠詞でマークされる。

(39)　How did you get here, **by** magic carpet? (TVドラマ*Columbo*, Episode 3, Murder by the Book)
（どうやってここに？魔法の絨毯でも使ったのか？）

(40)　Samantha:　**By** parachute?
Clara:　Yes, I thought this time I'd drop in quietly.
(TVドラマ *Bewitched*, Season 3, Episode 2, Moment of Truth)
（サマンサ：パラシュートで来たの？
クララ：うん、今回は静かに顔を出そうと思ってね。）

乗り物自体は物理的な存在物であるが、この用法ではその乗り物の移動手段としての側面（機能的側面）が焦点化され、その乗り物と移動主体である人間がどのような物理的位置関係にあるかということに関する情報は表に現れない。たとえば、移動するときに車の中にいるのと自

[6] 「coachがmetonymyに基づく意義展開を起こし、ここでは経路を指しているのだ」という解釈は成り立たないだろう。バスが通るための専用の道というものは普通存在しないし、経路用法に無理矢理持ち込んだところで、移動の完結性の問題が生じてしまう。

転車の上にいるのとでは、乗り物と移動者の位置関係に違いがあるが、車と自転車の移動手段としての機能に焦点が当たればby car/by bicycleというようにその区別は中和されてしまう。機能的側面ではなく物理的実体としての側面に焦点を当てた場合には、次のin/onのように前置詞の違いによってその違いを表現することができる。

(41) [...] it had occurred to me that the proposed trip **in** the car could be put to good professional use [...] (Kazuo Ishiguro, *The Remains of the Day*)
（車で旅行するというこの提案は、うまく仕事に活かせるかもしれないという気になっていた）

(42) We built our forts, played our games, invented our worlds in the backyard, and still later, there were our rambles through the town, the long afternoons **on** our bicycles, the endless conversations. (Paul Auster, *The Locked Room*)
（僕たちは二人で要塞を築き、二人で遊び、二人で裏庭に世界を創り上げ、さらに後になると、街を二人で散策するようになり、自転車に乗って二人で長い午後を過ごし、終わりのない会話を楽しんだ。）

乗り物に関わる前置詞としてbyを選択した場合とそれ以外の前置詞（inやonなど）を選択した場合の意味の違い（〈手段・機能〉解釈と〈物理的実体〉解釈の違い）は、*We went there [**by** car/**in** our car].*のようにどちらも使える例を見ていては掴みにくいが、(43)のように乗り物が移動の手段として解釈されていない場合にはbyは使えなくなるということを考えれば、*We went there [**by** car/**in** our car].*のようなペアにおいてもbyを選んだ場合とそれ以外の前置詞を選んだ場合で意味は異なるのだと想定するのが妥当であろう。

(43) "Where'd you go with her if you didn't go to New York?"
"Nowhere. We just sat **in** the goddam car."
(J. D. Salinger, *The Catcher in the Rye*)
（「ニューヨークじゃなかったら、どこ行ったんだよ、あの娘と。」
「どこも行ってねぇよ。車ん中で座ってただけだっつうの。」）

この例では、the goddam carはWe just satという事態が生じた場所を指定しているのであり、移動の手段を表しているのではない。従ってこのin the goddam carをby goddam carと書き換えることはできない。

なお、反論として、「by busのbusやby shipのshipがbus/shipの機能的な側面を焦点化したものであるならば、そのbus/shipは『物理的介在物』とは言えず、この論文で扱うべき対象でないのではないか」という主張がありうるが、機能に注目したからといってbus/shipの物理的な側面が

意識から完全に忘れ去られるわけではない。たとえば、次のsmall/blackはplane/taxiの大きさ／色のことを言っており、乗り物の物理的な側面が話し手の心的なイメージの中に含まれていることの証左である。

(44)　The quickest and safest way to get there is the 45-minute flight **by** small plane from Wilson airport in Nairobi.　(COCA)
（そこに到達する最もはやく安全な方法は、ナイロビのウィルソン空港から45分間小型飛行機に乗ることだ。）

(45)　Of course it is possible to charge too much for a product. Anyone who has tried to travel around London **by** black taxi will be more than aware of this. Charming as this form of travel can be, most Londoners shun it because the fare per mile has been pushed up so high.
(Googleブックス)
（もちろん、製品の金額を高く請求しすぎてしまうということは起こりえる。これは、ロンドンを黒タクシーでまわろうとした経験のある人にとっては、知っているどころの話ではないだろう。魅力を備えているはずのこの移動形態を、ほとんどのロンドン人は、一マイルあたりの料金があまりに高いといって避けているのである。）

従って、by busのbusやby shipのshipがbus/shipの機能的な側面を焦点化しているからといって、bus/shipが物理的介在物でなくなっているということにはならない。乗り物用法は間違いなく本稿で扱うべき対象である。

5.2　可算性の検討

以下に示すように、この用法の補部名詞句は不定冠詞を伴うことも複数形を取ることもできない。従って補部名詞句は不可算名詞句に限られると言える。

(46)　*　He came here **by** a train.
（彼は電車でここに来た。）

(47)　*　A lot of people came to our town **by** buses.
（たくさんの人がバスで私たちの街を訪れる。）

6.　メッセンジャー用法

6.1　定義と特徴付け

人が手紙や荷物などを別の人に届ける手段として、本人が出向くほかに、別の誰か（secondary agent）に届けてもらうという手段がある。このsecondary agentにあたる人間を導くのにbyを用いることができる。これを「メッセンジャー用法」と呼ぶ。なお、この用法のby句が修飾する

動詞句のheadとなる動詞はsendが圧倒的に多い。

(48) Long lengths are difficult to mail or send **by** carrier [...] (BNC)
（長さの長いものは郵送したり運送業者を介して送ったりすることが難しい）

(49) [...] he's best known for sending his photo film **by** carrier pigeon during the Allies' Normandy invasion in World War II. (COCA)
（彼は何より、第二次世界大戦中の連合国軍によるノルマンディー進攻の間、写真のフィルムを送るのに伝書鳩を使ったということで知られている。）

(50) In those days before fax machines, e-mails, and express letters, she had sent the treatment to California **by** private courier [...] (Paul Auster, *Oracle Night*)
（ファックスもEメールも速達もなかった当時、彼女は台本をカリフォルニアに送るのに宅配便を使っていた。）

(51) He sent the order **by** messenger. (OALD8)
（彼は指令を届けるのにメッセンジャーを使っていた。）

(52) Those not attending the meeting may vote **by** proxy. (COB6)
（会議に出席していない者は代理を通じて投票してもよい。）

この用法では、secondary agentにあたる人間が「物理的介在物」である。「物」と言ってもここではthingではなくentityの意味であり、「物理的介在物」は人間を含む概念として提示したことに注意されたい（注1を参照）。

6.2 可算性の検討

Vizcaya (1997)が指摘しているように、現代英語の*He sent him two spears **through** his knights.*のthroughの代わりにbyを使うことが古英語期では可能であった。つまり、メッセンジャー用法のbyは可算名詞句を補部に取ることができた。しかし、現代英語では可算名詞句は容認されない。たとえば(51)(52)を次のように書き換えると非文になる。

(53) * He sent the order **by** a messenger.
（彼は指令を届けるのにメッセンジャーを使っていた。）

(54) * Those not attending the meeting may vote **by** a proxy.
（会議に出席していない者は代理を通じて投票してもよい。）

7. 可算性選択の原理

これまで見てきた「部位用法」「連結用法」「経路用法」「乗り物用法」「メッセンジャー用法」においてbyの補部名詞句の可算性の振る舞いは、以下の表のようにまとめられる。

表1 用法ごとに見る補部名詞句の可算性

用法名称	補部名詞句
部位用法	必ず可算
連結用法	介在物の物理的な実体に注目する場合には可算 介在物の中や上などを移動するものに注目する場合には不可算
経路用法	介在物自体を指示する場合には可算 介在物の中や上などを移動するものを指示する場合には不可算
乗り物用法	必ず不可算
メッセンジャー用法	必ず不可算

こうした可算性の振る舞いは、次のように考えれば統一的に説明できるように思われる。

(55)　byの補部名詞句が表す物理的介在物自体が移動したり、その介在物の上や中などを行為者とは別の人間や物体が移動したりすることによって、その介在物が事態成立の手段として機能するという概念化がなされている場合には、その物理的介在物は不可算名詞としてマークされる。一方、byの補部名詞句の表す物理的介在物がそこに存在していることそれ自体が手段として機能しており、移動は手段としての機能に関与しないというような概念化がなされている場合には、その物理的介在物は可算名詞としてマークされる。

この考え方に基づいて、各用法の補部名詞句の可算性の振る舞いは次のように説明される。

乗り物用法とメッセンジャー用法においては、物理的介在物は二つの地点を移動するからこそ行為者の移動・伝達［配達］の手段として機能するのである。このため補部名詞句は必ず不可算名詞句としてマークされる。

経路用法では、補部名詞句（経路名詞句）の指示対象が経路自体ではなくそこを移動する乗り物にシフトした場合には、その経路名詞句は不可算名詞としてマークされる。これは、乗り物がただそこに存在するだけでは移動できず、その乗り物が動かなければ移動達成の手段になりえないからであると考えられる。一方、補部名詞句の指示対象が物理的介在物（経路）自体である場合には、その経路は可算名詞としてマークされる。これは、経路が動いたり行為者以外の何かが移動したりしていなくても、行為者自身が移動していれば、動詞句の表す完結的移動は実現されるからだと考えることができる。

連結用法においては、物理的介在物自体が存在していることよりもその中や上を別の何かが移動することによって手段が達成される、という見方をしている場合には、その介在物は不可算名詞でマークされるのであった。たとえば、(15)(16)では、ホース・道路の存在自体よりもホ

ースの中の液体、道路の上の自動車が二つの地点の間を移動することによって目的が達成されるという見方がとられているからrubber hose/roadが不可算名詞としてマークされていたのだ、と考えられる。一方、(11)-(14)のように物理的介在物の存在自体によって目的が達成されている場合には、介在物は可算名詞句としてマークされる。

部位用法に関しては、部位が不可算名詞句としてマークされることは許されず、必ず可算名詞句でマークされる。これは、部位が動かない方がその部位を介した位置的一体化が容易になるからだと考えられる。

8. 結語

英語前置詞byが物理的介在物を導く五つの用法を分析の対象とし、byの補部名詞句の可算性が介在物の移動性と関連していることを指摘した。どうしてそのような関連があるのかということについては、推測の域を出ないが、動作主（agent）を導く用法との差別化という観点から説明ができるかもしれない。動きの自由度が高いものほど動作主になりやすく、また可算名詞の方が不可算名詞よりも動作主になりやすいため、動くものをbyの補部名詞句の位置で可算名詞句としてマークしてしまうと、まるで動作主用法のbyであるかのように見えてしまう。もちろん、動作主用法のbyが認知的際立ちのそれほど高くない用法であるとしたら、動くものがbyの補部名詞句の位置で可算名詞句としてマークされているからといって、動作主のbyのように見えてしまうということは起こらないだろう。しかし、現代英語のbyの用法のうち、動作主用法は頻度が非常に高く、Corston-Oliver (2001)によればBNCから抽出した1000例のうち713例が動作主用法であったとのことである。このようなことを考慮すると、本稿で分析した五つの用法において、移動する介在物が可算名詞ではマークされないという傾向の背後には動作主用法との差別化があるのだと考えることにも、ある程度の妥当性がありそうである。今後さらに実証的な証拠を集めていきたい。

参考文献

Corston-Oliver, Monica (2001) Central meanings of polysemous prepositions: Challenging the assumptions. Paper given at International Cognitive Linguistics Conference, Santa Barbara, CA.

Cuyckens, Hubert (1999) Historical evidence in prepositional semantics: The case of English *by*. In: G. Tops, B. Devriendt, and S. Geukens (eds.) *Thinking English grammar: To honour Xavier Dekeyser, Professor Emeritus* (Orbis Supplementa 12), 15-32. Leuven: Peeters.

Hirasawa, Shinya (2011) On the *joint* sense of the English preposition *by*. *Tokyo University Linguistic Papers* 31: 31-52.

平沢慎也（2013）「英語前置詞byの意味ネットワークにおける〈差分〉用法について」『日本認知言語学論文集』13: 96-107.

Vizcaya, Palancar (1997) A private history of the preposition *by* in English: From instrumental to passive

agent. *Cuadernos de Filología Inglesa* 6: 123-145.

辞書

AHDE4 = The American Heritage Dictionary of the English Language (4th edition). 2001.

CALD3 = Cambridge Advanced Learner's Dictionary (3rd edition). 2008.

COB6 = Collins COBUILD Advanced Dictionary of English (6th edition). 2009.

HEED = Harrap's Essential English Dictionary. 1995.

LDOCE5 = Longman Dictionary of Contemporary English (5th edition). 2008.

MEDAL = Macmillan English Dictionary for Advanced Learners. 2002.

OALD8 = Oxford Advanced Learner's Dictionary (8th edition). 2010.

Web3 = Webster's Third New International Dictionary of the English Language Unabridged. 2000.

コーパス

COCA = Davies, Mark. (2008-) *The Corpus of Contemporary American English: 425 million words, 1990-present*. Available online at http://corpus.byu.edu/coca/.

COHA = Davies, Mark. (2010-) *The Corpus of Historical American English: 400 million words, 1810-2009*. Available online at http://corpus.byu.edu/coha/.

TIME = Davies, Mark. (2007-) *TIME Magazine Corpus: 100 million words, 1920s-2000s*. Available online at http://corpus.byu.edu/time/.

BNC = Davies, Mark. (2004-) *BYU-BNC*. (Based on the British National Corpus from Oxford University Press). Available online at http://corpus.byu.edu/bnc/.

The Complement of *by* in the Intermediary Use: Choice between Count Nouns and Mass Nouns

Shinya Hirasawa
Hiralingual1026@gmail.com

Keywords: by, means, countability

Abstract

When a person engages in an action, he sometimes uses as a means an entity that lies between two places. That entity is sometimes introduced into discourse by the preposition *by*. The present study deals with five such uses of *by* (e.g. the meronymic use, the linking use, the path use, the transportation use and the messenger use) and discusses whether the complement of *by* is marked as a count noun or a mass noun in each use. This research reveals that the countability choice is governed by a certain rather simple principle:

The intermediary entity is marked as a mass noun when the speaker conceptualizes it in such a way that it functions as a means because it is associated with the idea of motion. On the other hand, the intermediary entity is marked as a count noun when the speaker conceptualizes it in such a way that it functions as a means because of its very existence and that motion associated with the intermediary entity is not crucial to its function as a means.

This principle might be motivated by the desire to distinguish the use in question from one of the central uses of *by*, i.e., the agent use.

（ひらさわ・しんや　東京大学大学院）